秋季大学キリスト教週間への招き

田　淵　　結

もうかなり前のある新聞の記事で、その当時、世界一長生きができ、世界一平和で、お金持ちの国はどこか、というものがありました。みなさんはどう思いますか。スイス、北欧、ブルネイ　それとも…　そう、それとも日本だったのです。これだけの経済的規模で戦後一度も戦争をせず、平均寿命は８０歳になろうというのは日本がトップだったのです。さて２１世紀を迎えた今、私たちの社会はどうなのでしょう。

確かに今も日本は国際間での戦争に直接に参加はしていませんし、寿命も世界のトップレベルですが、経済もまた上向きだといわれますが、実はその当時も今も、私たちひとりひとりが「世界一平和で、長生きで、お金持ち」ということをほとんど実感できないままできているのではないでしょうか。その大きな理由のひとつとして特に最近考えさせられることが、子どもから大人まで、「ひとのいのち」をあまりにも軽く扱ってしまう風潮が非常に強まってきていることがあります。中学生から大学生もが加害者となる殺人事件、幼い子どもたちが犠牲者となる交通死、いじめや虐待、さらに小学生を含めての自殺は年間３万人となってきているこの社会が、「世界一平和」と呼ばれるのは最大の皮肉としかいえません。このような社会的風潮のなかで、今こそ改めて「いのち」の大切さ、尊さ、かけがえのなさについて、真剣に向き合っていくことが必須の課題となっています。

この秋、関西学院大学の大学キリスト教週間は、今私たちが切実に問われている、この「いのち」について考えます。２００８年には初等部（小学校）を開設し、また人間福祉学部を設置して、小学生から大学生、社会人にまでいたる教育の場としての関西学院が、神様から与えられたひとりびとりのいのちをはぐくみ、その重さを感じ取るための学園であるために、ともに考えるときとなることを願っています。特に大学生のみなさん自身が、これからの自分の人生の中で、どう皆さん自身のいのちと同時に、多くのみなさんの後に続く人たちの「いのちをはぐくむ」責任と課題を担っていくことになるのです。ぜひこのキリスト教週間を通じて、今の社会にとってもっとも大きな問いかけである「いのち」について、みなさんなりに思いを深めてください。

（宗教総主事）